

聖書:使徒の働き16章1～15節

説教:私たちを助けてください

はじめに

イエス・キリストの救いの福音はイスラエルを越えて海外にも宣教され、異邦人も救われ教会に集うようになりました。そのことから一つの問題が起きます。「異邦人も割礼を受けてユダヤ人のようにならなければ救われない」と教える人たちが現れたのです。このことは大きな問題になり、パウロはエルサレムに出かけて、使徒たちを含めて考えてもらうことにします。旧約聖書を調べると、神は異邦人も救ってくださると約束していると書かれている。ならば、救いの条件として割礼は必要がないのだとの結論に至り、この問題は一件落着となりました。

パウロが次に考えたことは、かつて伝道旅行をして開拓した教会のことでした。異邦人の割礼問題は、必ずほかの教会でも起こるに違いない。一刻も早く行って、異邦人には割礼が必要がないのだと知らせなければ。そこで彼は二回目の伝道旅行に出発することにします。出発にあたっては意見の対立があつて、結局シラスと一緒に出かけることになるのですが、後から振り返ればこのことも益に変えられていった。それが前回までのあらすじでした。

今日の箇所には、テモテとリディアが登場します。この人たちがどのようにして召されていくのか。そこにどのような神の働きがあつたのかを見てまいります。

1 テモテ

1) 母はユダヤ人、父はギリシヤ人

まずテモテです。1節に書かれているように彼の母親はユダヤ人で父親はギリシヤ人でした。今なら、国際結婚は珍しくないので私たちには違和感がありません。ところが、当時のユダヤ人社会ではそうではなかった。というのは、申命記7章3節にこう書かれているからです。「また、彼ら（異邦人）と姻戚関係に入ってはならない。あなたの娘をその息子に嫁がせたり、その娘をあなたの息子の妻としたりしてはならない。」ユダヤ人が外国人と結婚すると、必ずほかの神々を拝むようになるから、それが理由でした。律法ですから守らなければいけません。しかし海外に住むようになるとそうもいかない。異邦人と一緒に生活していれば、そのうちユダヤ人が外国人と結婚することも

ある。テモテの両親はまさにそのようなケースでした。

パウロはこのテモテこそ将来立派な宣教師になるだろうと見込んで、彼を伝道旅行と一緒に連れて行くことにいたします。

2) 割礼は必要ないと言っていたはずでは？

それはよいとして、3節を読んで疑問に思わなかったでしょうか。「パウロは、このテモテを連れて行きたかった。それで、その地方にいるユダヤ人たちのために、彼に割礼を受けさせた。彼の父親がギリシヤ人であることを、皆が知っていたからである。」エルサレム会議で、異邦人は割礼を受けさせる必要はないと決まりました。パウロも最初から異邦人の割礼に反対していた。それなのにどうしてテモテには割礼を受けさせるのか。パウロは心変わりしたのか。

そうではありません。ここに一つの事情があります。ユダヤ人社会では母親がユダヤ教を信じているのならば、子どもも母親の宗教に属するとみなす律法があつたそうです。テモテ第二の手紙を見ると、テモテの祖母ロイス、母ユニケともに熱心なユダヤ教徒だつたことが書かれている。それが、パウロの第一回伝道旅行のときにキリスト教に改宗してクリスチャンになった。でも、ユダヤ人社会ではテモテはユダヤ教徒とみなされますから、本来は割礼を受けなければならない。ところが受けていなかった。そこがこの問題のポイントです。

テモテは、クリスチャンになったのだからいままさら割礼は必要ない。そう私たちは考えたい。でもパウロは割礼を受けさせた。なぜだろう。パウロがこのとき何を考えていたか。そのことは第一コリント9章20節を読むとわかる。「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには、—私自身は律法の下にはいませんが—律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。」

パウロがテモテを選んだのは、もちろんテモテの信仰ということもありますが、もう一つ大切な要素があつたように思います。彼はギリシヤ人を父に持つ異邦人であると同時にユダヤ人という両方の国籍をもっています。異邦人の立場もユダヤ人の立場も、彼は両方のことがよく分かる。でも一つ

だけ欠けたところがあった。これからユダヤ人にも伝道しなければならない。であれば、ユダヤ人にはユダヤ人のようになる。それで割礼を受けさせた。異邦人もそうですが、ユダヤ人にも両方伝道できるようにと、周到に準備がなされていきました。

2 リディア

1) 道が閉ざされる

そのようなことがあってから、次の目的地であるアジア方面に出発する。ところが、突然アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられる。それではということで、ビティニアに進もうとしても、こんどはイエスの御霊がそれを許さないととなる。これは困ったでしょう。テモテを見つけたときは、神はこの旅を祝福し、順調に勧めてくださっていると思っていたのに、なぜ急に前に進めなくなるのか。非常に戸惑ったはずです。

そんなとき、パウロは幻を見ることになります。9節。「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください。」この幻に現れたマケドニア人とは誰なのか。そのことはまた最後に触れたいと思います。彼らは神が道を示してくださったと確信し、直ちにマケドニアに向かい、その地方の最も大きな町であったピリピに入ります。ところが、いったいどこに助けを求めている人たちがいるのか皆目分からない。幻も見えなければ声も聞こえません。

2) 川岸で礼拝を守る女性たち

安息日の朝になりました。いつもなら会堂に向かうのですが、このときは会堂の場所がわからなかったようです。そこでパウロたちはどうしたか。13節。「そして安息日に、私たちは町の門の外に出て、祈りの場があると思われる川岸に行き、そこに腰を下ろして、集まって来た女たちに話をした。」ここは少し説明が必要です。

二年前、イスラエルに行かせていただいたとき、エルサレムにある嘆きの壁にも行ってきました。皆さんも写真やなにかで見たことはあるでしょう。行ってみると壁の前には男性しかいない。女性はフェンスで隔てられた別の場所で祈るのだと言われました。ユダヤ教では男と女は同じ所では礼拝しないという律法があるのだそうです。ピリピの町でもそれが守られていて、男性は会堂に集まって礼拝をしていた。ところが女性には会堂がない場合もある。そこで女性たちは風通しのよい川岸に集まって礼拝をしていた。それが「祈りの場」と言われて

いたところでした。パウロはそこを見つけ、そこでキリストの福音を語りました。

3) 回心する

その話しを熱心に聞いていたのがリディアという異邦人の女性です。異邦人ではあったけれど、ユダヤ人から旧約聖書を教えてもらい、神を敬う信仰を持っていたようです。この日リディアは、パウロが語る福音を聞いてすぐに回心し、家族の者たちと一緒にバプテスマを受けました。

このようにしてピリピの町で最初に救われる人が起こされ、おそらくリディアやその家族が中心としてピリピに教会が建てられていったと思われま。パウロは後でピリピの教会にあてて手紙を書いています。それを読むとパウロがピリピ教会をどれほど愛していたのかがよくわかります。

3 「私たちを助けてください」

1) 神のご計画

この箇所を、神のご計画という視点で見直していきます。テモテを見つけ出したとき、パウロはこれは神が与えてくださった恵みであると考えたでしょう。順調な滑り出しです。ところがアジア地方、今のトルコ共和国の内陸部になりますがそこへ行こうとしたら、道を閉ざされてしまいます。なぜ道を閉ざすのか、神はなにも答えてくれません。みなさんもこれと同じようなことを経験しているかも知れません。みことばをいただき、あのときは確信を持って決断して前に進んだ。ところがある日突然、なにもかもがうまくいかなくなる。どうしてこんなことが、ということが降りかかってくる。具体的には、自分や家族の健康のことであったり、生活の糧のことであったり、人間関係であったり、さまざまあります。いったい何が神の計画なのか、さっぱり分からなくなって途方に暮れるということがあります。神があらかじめ、これはこういうことだから忍耐しなさいと言ってくれるなら我慢もできる。ところが何も教えてくれません。

2) 神は叫ぶ者のために働く

優れた信仰者であったパウロでさえ、「神の道はなんと窮めがたいことでしょう」とロマ書に書いているくらいです。神のご計画をすべて知ることは誰もできない。しかしだからと言って、あきらめるということでもないと思います。

もう一度この箇所を見てください。確かにパウロは、一時期道が閉ざされるかのように感じられる時期を過ごさなければならなかった。でも、神は一人のマケドニア人の姿となってパウロに幻となっ

て現れ、叫んだと考えたらどうでしょうか。「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください。」この人は特定の誰かというのではない。ピリピの町で本当の救いを求めて祈り叫んでいた人たちの声を神が代わりに叫んでいる。パウロたちの道を閉ざしてでも、ピリピを救おうとされた。そのように考えることができます。

これは私たちにとって二つの大きな励ましになります。一つは、いまもし道が閉ざされていると思われる方がいても気落ちする必要がないことになる。誰かを救うために神があえていまあなたの道を閉ざしている可能性がある。

二つ目は、いま神に助けを叫ぶ方がおられるなら、神は必ずその声を聞いてくださっている。叫ぶ者を救うためにあらゆる事をしてくださる。そのような望みを強くすることができます。

本当にそうしてくれるのでしょうか。十字架を見れば明らかです。神は、苦しみ叫ぶ者の声を聞かれて胸が押し潰されるほどに心配し、ひとり子であるイエス・キリストを人として私たちのところに送ってくださったのではないですか。神は、そのようなことまでして罪人である私たちを救おうとされているのです。

「私たちを助けてください。」この叫びに神は必ず答えてくださる方であることを覚えて、感謝します。